

仲間がいるから頑張れた

―田方支部消防操法大会を終えて―

消 防技術の向上と士気の高揚を図り、規律厳正な団体行動と消防団活動の進歩充実に寄与することを目的とした田方支部消防操法大会が、5月26日、熱海観光港芝生広場で行われました。

大会は、6人編成によるポンプ車操法と、5人編成による小型ポンプ操法の2種目が行われます。操法とは、実際の火災現場で、迅速・正確かつ安全に火を消すための訓練です。今大会は5市1町（熱海・伊東・三島・伊豆の国・伊豆・函南）から54人の消防団員が出場。優勝した分団は県大会に挑める、消防団にとって最も大きな大会です。

今回は、ポンプ車操法で見事準優勝を果たした第5分団の皆さんに、大会を振り返りながら消防団について話を伺いました。



見事な放水を見せる第5分団

消 防操法大会。それは消防団にとって最大のイベント。開催は2年に一度、さらに伊豆の国市は各分団による輪番制をとっているため、同一種目で一つの分団が出場できるのは実に24年に一度。この貴重な機会を『自分たちの活動を広く知ってもらえる最大のチャンス』ととらえたという小川分団長。この

日のために、約1年前から団員みんなで訓練を積んできました。

勝負は一瞬

当日はさわやかな五月晴れ。各分団の団員はもちろん、家族やOB、県市町の関係者ら約1,500人もの観衆が集まり、会場は消防独特の異様な空気に包まれていました。一番員の杉山さんもスタートの前に「今までに味わったことのない雰囲気だった。」と話します。

泣いても笑っても最後の勝負が始まりました。審査員の始めの合図とともにすべてが始動。朝も夜も練習を重ねてきた成果をこの一本に発揮するために。



競技を見守る多数の観衆

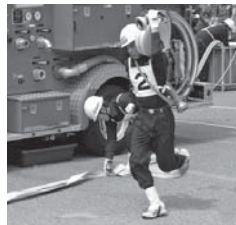
「正直、優勝しなかったですね。」と悔しがる補助員の岩田さん。指揮者の濱さんも「結果を出して、支えてくれたみんなに恩返しがしたかったです。」と言います。しかし、それでも要員のみんなからは充実感に満ちた表情がうかがえます。

準優勝という結果を受け

勝負は一瞬でした。「いつも通りできた。」と胸を張る二番員の鈴木さん。出場順番の変更を余儀なくされるアクシデントに見舞われたにもかかわらず、彼らはその逆境をプラスととらえ、自分の持てる力を存分に発揮しました。



第5分団の役員および出場要員（敬称略）
右から小川彰弘（分団長）、濱洋和（指揮者）、杉山敦士（1番員）、鈴木将平（2番員）、金子啓佑（3番員）、金井泰浩（4番員）、岩田勝（補助員）、高井一樹（機械部長）



ポンプ車操法の花形、二番員の鈴木さん

今大会を通して得られた一番の財産ですね。」と小川分団長は少し恥ずかしそうに話してくれました。

あらためて今、地域の『消防団』を考える

消防団の最大の使命は地域住民の生命と財産を守ること。彼らは、大雨や台風が来れば一晩中、河川水位の監視を続け、翌日は普通に自分の職場へ出勤します。火事があれば夜中だろうが真っ先に消火に向かいます。

果たしてそこまでして消防団活動に従事する理由とは。これは一重に『仲間がいるから』という理由に他ならない

消防団に入りませんか

消防団は、一緒に活動できる仲間を募集しています。男女は問いません。興味のある人は、ぜひご連絡ください。

☎ 地域安全課 055(948)1412

皆さんの支えがあったからこそ

第11分団小型ポンプ操法で努力賞
市 代表であるという誇りを持って、週6日間、早朝および夜間訓練に励みました。結果は努力賞でしたが、頂点を目指した活動の中で団員が流した汗、流した涙の数だけ人間的にも成長でき、団員相互の絆がより一層深まりました。

第11分団（田京）
団員数 29人
団員の平均年齢 27.7歳

連日、消防団活動ができたのは、消防団本部をはじめ家族、友人、地域の方々の支え、勤務先の理解があつてのことだと感謝しております。感謝の気持ちを忘れず、災害発生時には市民に恩返しできるよう団員一丸となって消防団活動にまい進いたします。ご声援ありがとうございます。

第11分団長 小田川真

操作の合図は目と耳で確認



火点に向け放水する指揮者

左から堀江延正（1番員）、新村大（2番員）、石井弘希（3番員）、関野恭輔（指揮者）（敬称略）